

一人でないから続けられる

東日本大震災の直後、その1年前の卒業生から学校に電話がありました。被災地に行きたいから、行事用のテントを貸してほしいと。現地状況を見れば到底返却されることは難しいと思いましたが、何かしなないといけないという切迫感が伝わり、テント一式と炊き出し用具を預けました。それ以降、多くの在校生や卒業生が現地に出かけてボランティア活動を行っています。考えたことをすぐ行動に移す。自分から動く。そんな生徒が多いように感じます。

今回紹介するのは、高校2年生の亀井美織さん。昨年の夏休み前に、被災地支援に行こうという廊下に貼ってあったポスターを見たのがきっかけで、東北の被災地ボランティアを体験しました。何かを経験して感じたり吸収したりしたいという単純な思いからだったそうです。

被災地支援

まなぶ

海岸でゴミを集める仕事をしました。

集めたのは全て日常生活に使われるもので、「ゴミと言ってはいけない」と感じたそうです。達成感を感じたけれど、自分が本場に役に立っているのか不安でしたが、現地で聞いた「忘れられたくない」「来てもらえるだけで心強い」という言葉が心に残りました。

忘れてはいけないということは、その後の彼女の気持ちを縛りました。時にはつらくなってしまっても。お父さんはそんな娘にこうアドバイスしてくれたそうです。「思い出す時間を大切にしたらいい」

その後、被災地とつながる目的で結成された生徒のグループ「ぼっぼの会」に参加しました。「行って悲しくなって終わりじゃない。現地では、大切な人や周りの人をたくさん愛してほしいと言われた。自分の日常の生活につなげていくこ

とが大事な」

今、ぼっぼの会は福島県伊達市の大石小学校の子どもたちを迎える準備をしています。先日、校長先生と代表の児童2人が来校して高校生を交えて昼食会を行いました。「あの子たちに会えてすごくよかった。関わること、つながっていきけることがうれしい」。美織さんはこの春休み、できれば大石小学校を訪ねたいと考えています。

「人とつながることが嬉しいと感じ始めたのは、中学3年くらい。体験学習で保育園に行ったあたりかな。続けられているのはたぶん一人ではないから。一緒に話し合い行動する友達がそばにいるから」

(自由の森学園高校校長 鬼沢真之)



教育コラム「まなぶ」は今回で終わります。4月からは、子ども向けの本を紹介するコラム「木坂涼の『本ともクラブ』」と、新・教育コラム「はぐむ」を隔週で交互に掲載します。